

第四回

アンドレイ・プラトーフ 『ジャン』

今回はアンドレイ・プラトーフ（1899–1951）という作家を取り上げます。前に読んだハルムスほどではありませんが、やはり世界観や文体にきわめて特異なものを持っています。それが作家の文学的才能によるものか、それとも彼の生きた時代によるものかを考えたいと思います。

ソ連における「成功と幸福」

第一部の後半、近代文学における「幸福と成功」の主題の重要性についてお話ししました。自由と平等という近代的価値の普及によって幸福と成功の捉え方は大きく変わり、個々人が自らの天分と努力によって成功をつかみ取るべしというストーリーが社会的に力を持ちました。たとえば「天は人の上に人を作らず、人の下に人を作らず」という福沢諭吉の言葉はこのストーリーを近代日本に広めるためのスローガンだったと言えるでしょう。万人が平等で自由である以上、各人努力して各々の成功と幸福を目指すべきだ、というのが福沢の意図でした。

近代小説のフォーマットのうち、「成功と幸福」に関わるものは色々あります。「純朴な青年が努力を重ね、苦難を乗り越え成功を勝ち取る」、「天分豊かな青年があまりに大きな野心のために失敗し、悲劇的な結末を迎える」、「青年が成功を目指して都会に旅立つが、最後は故郷と家族のもとに帰り、ささやかな幸福に満足する」、「若い女性が男女差別に屈せず、成功を得ようと闘う」

等々です。

ソ連ではどうだったか。ソ連型社会主義では「自由と個人」について根本的な見直しが進みました。「自由と個人」の現実的土台（下部構造）と言うべき私的所有制度が否定されたからです。先祖から受け継いだ財産はもちろん、自力で築いた富でさえ、ソ連国家は私的所有を認めませんでした。土地と農作物、工場と製品——こうした財は個人に帰属すべきものでなく、集団で共同所有すべきだというのが社会主義の基本思想であり、ソ連社会の土台となりました。社会主義国家の建設が二十世紀最大の実験と呼ばれたのも無理からぬところです。

そのため、「成功と幸福」についても見直しが行われました。目指されるべきは個人人の成功と幸福でなく、集団の成功と幸福でなければならぬ。要するに「チームとしての勝利」です。人は力を合わせ、集団的な成功と幸福を目指すべきである——簡単にまとめれば、これが社会主義の考え方です。

社会主義、さらにその先にあるとされた共産主義の理想を信じた人々にとって「集団的な成功と幸福」は個人的なそれより優れたものでした。その優位性はたんに道徳的なものでなく、人類の発展という観点からもそうだという信念があった点が重要です。人類の発展史上、「より進んでいる」ことがソ連社会が「近代の超克」を果たした証なのです。自分たちは昔ながらの集団主義に戻ったわけではなく、近代の個人主義を乗り越え、「新しい集団主義」を完成させつつある——社会主義建設に身を捧げた人々はそのことを信じていました。プラトーフもその一人だったのです。

難しい話になってしまったので、軽め話題に振りましょう。皆さんは「一人はみんなのために、みんなは一人のために（One for all, All for one）」という言葉聞いたことがあるでしょう。この言葉、好きですか？

私が思い出すのは、ソ連の映画監督セルゲイ・エイゼンシュテインの代表作で映画史上にその名を残す『戦艦ポチョムキン』（1925）です。この無声映画のクライマックスで「一人はみんなのために、みんなは一人のために」という言葉が画面いっぱい映し出されます。この言葉は日本でもテレビドラマなどでときどき見かけます。とくにスポーツものや学園もののように、集団性やチームスピリッツが主題になるジャンルで好まれるようです。

注目してほしいのは、このメッセージが目的志向型・課題達成型であることです。たんに「和を以て貴しとなす」、「仲良きことは美しきかな」と言っているのではなく、大きな目標を実現するために「一人はみんなのために、みんなは一人のために」動け、働け、戦え、と呼びかけているのです。その意味では、これもまた「近代の洗礼」を受けた考え方だと言えるでしょう。

ところで、この言葉の出典はどこでしょうか。気になる人は多いようで、ネット上でもよく話題になっています。アレクサンドル・デュマの長編小説『三銃士』というのが定説です。またしてもフランス起源ですね。

しかし『三銃士』は、出版当時(1844)はいざ知らず、今日では子ども向けの小説として読まれます。ということは「一人はみんなのために、みんなは一人のために」も、正義と名誉のために刎頸の友と力を合わせるという感動的な、しかし子ども向けの物語に似つかわしい言葉になってしまったのでないでしょうか。

「われわれは近代を乗り越えた！」と喜び勇んでも、周りを見回すと、自分たちはまだ近代の枠内において、先発国はずっと先を行っているという苦い感覚を、後発国は幾度となく味わいました。

ソ連が解体して久しい今日、『戦艦ポチョムキン』を見直すと、疑いやアイロニーを感じずにこの言葉を受け止めることのできた時代と人々を思い出さざるを得ません。かつてそこに属していた人も(私を含めて)まだ大勢いるはずです。

プラトーフとソ連文学

アンドレイ・プラトーフ(本名アンドレイ・クリメントフ)は1899年、ヴォロネシというロシア中部の町で生まれました。革命のとき十八才であり、自分の青春を新国家建設に捧げようと思うことのできた世代でしょう。彼は労働者の家庭に生まれたので、なおのことそうでした。

プラトーフは十代のうちから詩や評論、小説を発表し、地方都市の文壇で知られるようになります。とくに才能が表れたのは小説で、ソ連文壇の大御所、ゴーリキーにも注目されます。労働者出身ということもあって祝福されたデビューを切りました。

ところが、プラトーフの作品はしだいに発表を断られるようになります。

彼の特異な言語感覚と世界観がソ連の公式文学の枠に収まらなくなってきたのです。彼の短編小説を読んで激怒したスターリンが編集者を呼びつけて厳しく叱責したという伝説的逸話もあります。当然ながら、この出来事のあとプラトーフは長い間、作品を発表できませんでした。しかし、多くの詩人や作家のように逮捕されなかったのは不幸中の幸いと言えるでしょう。

『ジャン』、『チェヴェンゲール』、『土台穴』などの代表作は生前、発表されませんでした。原稿は妻と娘が守り抜き、1956年のスターリン批判後（「雪どけ」の時代）、そしてソ連末期のペレストロイカによりやく公刊され、母国と世界の読書界を驚かせることになります。

おそらく皆さんにとって不可解なのは、なぜソ連では文学がそれほど政治問題化したか、ということではないでしょうか。前に読んだハルムスの作品にしても、政治家にすれば頭を振って放っておけばよいような代物じゃないか、と思われたことでしょう。

近代社会の一つの特徴に「生の諸領域の分離と自律」と呼ぶべき傾向が挙げられます。たとえば、政治と経済は別の領域であり、国家（政治）は社会の経済活動になるべく関与すべきでないというのが自由主義の主張です。また、政教分離や三権分立は、近代社会の成立に決定的役割を果たしました。政治と教会、行政・立法・司法を切り離し、たがいに介入させないことで、各領域が自律性を保つようにしたのです。このシステムの土台にあるのは、各領域が自律的に機能することによって一つの権力が人間の生の全体を管理できないようにする思想です。諸領域がそれぞれの価値とルールに則って機能することで、一つの領域が他を支配できないようにするのです。

近代の中心的理念である自由も「諸領域の分離と自律」によって守られています。たとえば、表現の自由は政治の領域と言論の領域を切り離すことによって実現します。近代とはこうした「分離と自律」を社会全体に行き渡らせ、ネットワーク化するプロジェクトだったと言えるでしょう。

しかし、ソ連はこのプロジェクトを否定しました。これも「近代の超克」の一例です。レーニンは「文学の党派性」という原則を打ち出しました。それによれば、ソ連文学は党派的でなければならない。すなわち社会主義を支持し、社会主義建設に貢献しなければならないのです。社会主義に反対するのはもち

ろん、中立的・脱政治的であることも認められません。なぜなら、いかなる言論や芸術も何らかの政治的立場を持つからです。すべての芸術家は、自分の芸術活動がどんな政治的立場に拠っているか自問しなければならず、また共産党によってチェックされなければなりません。芸術の自律性、ましてや「芸術のための芸術」などナンセンス、それどころか有害なのです。

この思想を押し進めると、家庭内や友人間のおしゃべりであっても、政治的に問題があれば、国家機関に通報すべきだということになります。いかなる政治性も持たない(政治的責任を免ぜられた)「私生活」など存在しないからです。要するに、生のすべての領域が政治性によって統一されるべきだという思想です。

たしかに、これは息苦しい思想です。ソ連の文学や思想の自由な発展を妨げた大きな要因だと言えるでしょう。

その一方で、人間の生には何らかの統一的原理があるはずだという考え方は、今日でもなくなっていないように思われます。たとえば、今の日本では、差別的発言は、たとえ酒席であれ友人間であれ許されないという考えが定着しつつあります。一昔前なら「酔っていたから」とか「私的な場での発言だから」などの釈明で見逃された言動も、社会的非難を受けることが多くなりました。私生活であれ、経済活動であれ、芸術作品であれ、どんな領域でも差別は許されないという考え方も十分党派的であり、政治的です。反差別においては党派的・政治的であってよいとわれわれが考えるとしたら、それは反差別が「真理」だと信じているからでしょう——万人が従うべき統一的原理だと。

ソ連においては社会主義がそのような「真理」の座にありました。この点こそ、ポスト社会主義の世紀を生きるわれわれにとって想像困難(ないし想起困難)なことでしょう。プラトーフの小説を読むときも、彼がそうした社会と人間を描こうとしていたことに留意する必要があります。

『ジャン』から

これは文庫本で180頁ほどの小説で、短編と呼ぶには長く、長編と呼ぶには短い、いわゆる中編に属します。中編小説というジャンルは定義するのが難しいのですが、短編小説に較べると、描かれるできごとの時間的・空間的広がりがあります。逆に、長編小説とは違って、主人公は一人、描かれるできごと

基本的に一つです。まずはあらすじを見てみましょう。

〔あらすじ〕ロシア人の父と中央アジア出身の母をもつナザール・チャガターエフは、孤児としてソ連国家に育てられる。モスクワの大学を卒業後、共産党の指令を受け、故郷に戻り、「ジャン（魂）」と呼ばれる最貧の集団を救い、彼らの中に社会主義を建設するという任務に取り組む。しかしジャンの人々はあまりに貧しく、人間的な暮らしがどうあるべきかについての考えもない。チャガターエフはかつて自分を捨てた母ギュリチャタイ、老人スフィアン、純真な少女アイドゥイムらに少しずつ助けられながら、ジャンの人々の命を守るため、苛酷な自然と闘う。彼の献身とソ連政府の支援によってようやく最低限の生活を取り戻し、定住生活を始めたジャンの人々。だがある日、チャガターエフが気付くと、彼らはふたたび砂漠の四方八方に去っていくのだった……。

プラトーフは、1934年のトルクメニスタン出張の取材を踏まえて、この小説を書きました。当時、作家たちがソ連の各地に出張し、社会主義建設が成功を収めているようすを描いたのです。『ジャン』もそのような構想の下、書かれた作品でした。

しかし『ジャン』は出版が認められず、作家の死後十五年たった1966年ようやく発表されました。翌年にはすでに日本のロシア文学者、原卓也が翻訳しています。プラトーフの独特な文体を伝える名訳です。

この小説の主題は二つあります。一つは「幸福」です。極限の貧しさのなかで生きる人々を描きつつ、「人間にとって幸福とは何か」という近代ロシア文学の伝統的テーマを扱っています。もう一つは「民衆」です。近代化の恩恵から取り残されていた民衆を物質的・文化的に豊かにすることはソ連政府にとって喫緊の課題でした。共産党は民衆を幸福に導く使命がある、言い換えれば、何が幸福かを彼らに教える資格があると自認していました。極貧のジャンの人々を救うために共産党から派遣されるチャガターエフは、まさにこの信念を体現する人物像です。

『ジャン』の描写は「グロテスク・リアリズム」と呼ばれる筆致でなされています。一例を挙げると、ジャン民族の飢餓が極限に達したとき、チャガターエフはわが身を餌にして捕らえた大鳥を彼らに食べさせます。

人々はみな鳥のまわりに集まり、おっとりと眺めていた。彼らは食物を期待することを忘れてしまったのだ。そこでアイドゥイムは、タガンのぬぎすてたズボンの中からナイフをとり、鳥を裂いて、細かな肉片に刻みはじめた。食べることのできる者にはすべて、鳥肉を少しずつ与え、自分は分け与える前に、どの肉片からも血と汁を吸いとった。みなはその肉片を丸呑みし、骨を残らずしゃぶり、むしりとった羽毛をすすったが、腹はみたされず、いっそう食欲がましただけだった。⁴⁷

食物への執着を徹底的に描くところに現れるグロテスクさや、悲惨な世界を何でもないことのように描く奇妙な筆致は、深澤七郎の『楡山節考』(1956)などを連想させるものがあります。

『楡山節考』もそうですが、物質的にも文化的にも極貧の生のグロテスクな描写は、逆に民衆の精神的豊かさを浮かび上がらせませす。「民衆こそ真の幸福を知っている」というモチーフは近代小説の中軸をなしています。その意味で『ジャン』は教科書的な近代小説と言ってもよいでしょう。

次に引用する場面でチャガターエフは、隣の草小屋から聞こえてくるある夫婦の会話を聞くともなく聞いています(知識人が民衆の会話を盗み聞くというのもツルゲーネフ以来の定番です)。夫婦は自分たちには何の財産もない、唯一あるものと言えば自分たちの身体だけだと話しています。

二人は口をつぐんだ。チャガターエフはたまった耳垢をほじり、夫婦の寝ている辺りからまだ何か言葉がきこえはしないかと、さらに耳を傾けた。

「あたしたちは、ろくな財産じゃないね」女がつぶやいた。「あんたは瘦せてて弱いし、あたしときたら胸はしなびてて、身体の中の骨は痛むしさ……」

「おれはお前の骸骨だって愛すだろうよ」夫が言った。

そして二人はびたと沈黙した。おそらく、唯一の幸福を両手でつかまえるために、抱擁し合ったのだろう。

⁴⁷ 『プラトーフ作品集』原卓也訳、岩波文庫、1992年、171-172頁。

チャガターエフは、たとえ貧しい形でとはいえ、故郷に住む二人の人間の間ですでに幸福が存在していることに満足しながら、何かつぶやき、にっこりして、寝入った。⁴⁸

チャガターエフはジャン民族を救済し、彼らの幸福を実現しようとするのですが、他方、彼らは幸福の何たるかを知っており、それをすでに持っているのではないかという予感にも導かれています。これは十九世紀の作家たち、とりわけトルストイが開発したロシア小説のフォーマットであり、プラトーノフにも引き継がれているのです。

ところで、『ジャン』のテキストには深刻な問題がありました。それはエンディングに関するものです。「あらすじ」で見たように、ジャンの人々はせっかくのチャガターエフの貢献とソ連政府の援助にもかかわらず、定住地を捨て、三々五々、かつて放浪していた砂漠へ去っていきます。それを見て、チャガターエフはため息をつき、苦笑します。「なぜなら彼は、自分一人の小さな心と、偏狭な思想や意気ごみから、古代世界の地獄の底である、ここサル・カムシユの辺境に、真の生活を作りだそうと思っていたからだ。だが、どうすればより幸せになるかは、当人たちの方がよくわかっていた。彼らが生き残るのを助けてやっただけで十分なのであり、あとは彼ら自身に地平線のかなたで幸福をつかみ取らせるがいいのだ……⁴⁹」。

このエンディングは「幸福が何かを知識人よりもよく知っている民衆」という近代小説のフォーマットに見事にかなっています。

ところが、このエンディングは『ジャン』の本当の終りではなかったのです。1966年、ソ連で初めて発表されたとき、作品はたしかにここで終わっていました。しかしその後出た版では、さらに四つの章が続きます。チャガターエフは四散したジャン民族を呼び戻す決意をし、砂漠や町を放浪します。ところが、その間にジャン民族は自主的に定住地に戻っており、共同生活を再開して

⁴⁸ 同上、120頁。

⁴⁹ 同上、222頁。

いました。安堵したチャガターエフは少女アイドゥイムを連れてモスクワに戻ります——彼女に（かつて自分が受けたような）よい教育を与えるため、そして亡妻ヴェーラの連れ子クセーニヤに再会するために。こちらの版は次のように終わっています。長旅の疲れで寝入ったアイドゥイムを眺めながら、「チャガターエフがクセーニヤの手を自分の手の中に握ると、彼女の心臓の遠いせわしない鼓動を感じた。あたかも彼女の心臓が彼を助けようと飛び出そうとしているようだった。そしてチャガターエフは、人間への助けはただ別の人間からのみやってくると確信した⁵⁰」。

私の訳は冴えませんが、これもこれで感動的なエンディングです。しかし、翻訳者の原卓也は「書き加えられた四つの章はいかにもプラトーフらしくなく、なんとか検閲をパスさせて読者の目に触れさせたいという作者の必死の思いによるもの⁵¹」と判断して1966年版を用いたと解説で述べています。

ところがその後の草稿研究によって、ジャン民族が散り散りになるところで終わる版は作家本人が用意したものでなく、1966年、別の人物（おそらく編集者）が作ったものと判明しました。文献学的に言えば、1966年版はもはや使うべきではありません。次に『ジャン』が翻訳されることがあれば、チャガターエフがモスクワに戻る版が使われるでしょう。それは作品の印象を大きく変えるはずです。

なぜ1966年版の編集者たちは、原稿を途中で切って、存在しないはずのエンディングを「捏造」したのでしょうか。おそらく、『ジャン』という作品をスターリン批判後のソ連社会に受け入れやすいものにしたかったのでしょう。スターリン批判後、人々は今までより寛容な社会主義を求めています。『ジャン』の中で出てくるスターリンの名前がレーニンに替えられたり削られたりしたのも、「スターリン時代の小説」という印象を弱めるためだったでしょう。

死後十数年経ち、ソ連社会に忘れ去られていたプラトーフをどのような作家として復活させるかは、彼の原稿を長年守ってきた遺族や友人たちにとって重要な問題でした。彼らはプラトーフを「スターリン時代の刻印が押された

⁵⁰ 『プラトーフ作品集：幸せなモスクワ；ジャン』モスクワ、2010年、234頁。

⁵¹ 『プラトーフ作品集』原卓也訳、335頁。

作家」として蘇らせたくなかったのでしょう。

ここで、私の読書体験をお話しさせてください。私は1985年に大学に入ってから、プラトーフという作家の存在を知りました。当時、ゴルバチョフ書記長のペレストロイカ政策が始まっており、ソ連社会の自由化への期待が世界的に高まっていました。また、以前は出版できなかった文学作品が次々と発表されており、プラトーフへの関心もふたたび高まっていたのです。最初は原卓也訳で、次にロシア語原文で『ジャン』を読んだとき、たしかに最後の四章には「付け足し感」、あるいは「妥協の産物」めいた印象を受けました。原さんの言う通り、ジャンの人々が思い思いに散っていくエンディングの方が自由な感じでよいと思いました。

しかし1991年にソ連が解体し、さらに十数年たってこの作品を読み返したとき、かつて感動した1966年版のエンディングがどことなく中途半端なように感じたのです。その感じを一言で言えば、チャガターエフがモスクワに戻らないとプラトーフの世界は完結しない、ということです。「一つの党とモスクワ」は、スターリン時代を生きたプラトーフにとって乗り越えがたい世界の枠組だったのです。いかに特異な才能を持つ作家とはいえ、彼もまた時代の子でした。

皆さんはどちらのエンディングに興味を持たれたでしょうか。次回もプラトーフを読んでみたいと思います。

読書ガイド

アンドレイ・プラトーフ『プラトーフ作品集』原卓也訳、岩波文庫、1992年。

アンドレイ・プラトーフ『土台穴』亀山郁夫訳、国書刊行会、1997年。

プラトーフ『不死 プラトーフ初期作品集』工藤順訳、未知谷、2018年。